

北海道中央ユーラシア研究会 第107回例会

ザカフカス連邦（1922～1936）はなぜ創られたのか

竹村 寧乃

（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）

日 時：2012年4月5日（土）17:00-19:40

場 所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401

討論者：松戸清裕（北海学園大学法学部教授）

司会者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター教授）

出席者：16名

<報告要旨>

1921年3月グルジアのソヴィエト化以降、ロシア共産党中央委員会カフカス局の主導で、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア三共和国の経済的な統合が進んだ。さらに1921年11月のカフカス局による「ザカフカスの連邦に関する」決議、1922年3月の三共和国による「ザカフカス連邦的同盟（FSSSRZ）」条約締結を経て、1922年12月にザカフカス連邦（ZSFSR）が成立した。



このようなザカフカス連邦の形成過程と、いわゆる「グルジア問題」との関係は、これまで高橋清治やJ.スミスらが、M.レヴィンの単著『レーニンの最後の闘争』（原著1967年）やS.ハルマンダリヤンの単著『レーニンとザカフカス連邦の形成』（1969年、イエレヴァン）等をもとに明らかにしてきた。しかし彼らの関心の対象はソ連成立（1922年末）過程、そこでのボリシェヴィキの民族政策のあり方や指導者個人の言動であり、ザカフカス連邦の形成理由は断片的に示されているにすぎない。また、ソ連史学においては、レーニンやスターリンの意向に沿い、各共和国が自発的・段階的に統合を進めたとしている。それらの研究は、三共和国の独立政府（1918～1921年）の政策と国外勢力による干渉によって悪化した経済の復興と民族対立の解決、国内外の反ソ勢力に対する防衛などをザカフカス連邦創設の目的として挙げている。

三共和国の協力や緊密な統合の必要性自体は、ザカフカス連邦形成当時の言説・先行研究の双方において、ほとんど疑問視されていない。その具体化をめぐる「同盟か、連盟か、連邦か」あるいは「連邦の創設は共和国の独立の実質的な廃止を意味するのではないか」といった点が論じられたが、抽象的なやりとりや極端なたとえ話に終始することも多かった。

本報告では、「なぜ三共和国がひとつにならなくてはいけなかったのか」という観点から、これまで参照されてきたレーニン介入後（1923年以降）の議論ではなく、1921～22年当時の現地における議論に注目した。

先行研究によって諸説あるが、連邦創設の初期のアイデアは、三共和国間の領土問題の解決という文脈で現れていた。その後、域内の通貨・鉄道統合が目指されたが、現地の抵

抗を受けて、政治的統合が企図された。また、第1回アルメニア・ソヴィエト大会でのムラヴァン演説、トビリシ党組織集会でのオルジョニキゼ演説などから、1921年10月のトルコとの領土交渉の際に、二国間条約ではなく、三共和国統一の外交政策の必要性が確認されたことも、1921年11月のカフカス局決議につながったと考えられる。

一方で、1922年2月には、ヴェノヴァ会議において三共和国を含むソヴィエト側七共和国の利益保護をロシア連邦に委ねるといった協定がモスクワで調印された。また、1922年以降は三共和国の在外政府代表部・通商代表部が廃止され、ロシア連邦の代表部にザカフカス連邦的同盟の代表が入ることになった。このように、外交分野では1922年3月の連邦的同盟形成以降ロシア連邦への統合が進み、三共和国の統合の理由として対外的な要素について特定の事例への言及は目立たなくなる。

1921年3月以降のグルジアで特に抵抗が根強かったことは、先行研究により明らかになっている通りだが、そのようなカフカス局への反抗的な態度が、ザカフカス連邦支持派の発言内容にも影響を及ぼしているようにみえる。ミヤスニコフは1921年当初、諸外国に対する防衛と経済状況を連邦形成の理由に挙げていたが、1922年以降、共和国における「地方主義」や民族対立に言及していくようになる。

先行研究において示唆されている通り、ザカフカスの統合に関しては交通や財政等他に多くの要因が存在しており、時期によって深刻さや統合の進捗状況が異なっていたと考えられる。今後は、上述の諸要因について当時ザカフカスがどのような状況にあったかをふまえて形成理由を明らかにしていきたい。

【記：竹村】

<参加記>

報告に続いて、報告者の竹村氏と討論者の松戸清裕氏（北海学園大学）の間で史料をつき合わせての激しい議論が行なわれた。その最大の争点は、スターリンのいわゆる「自治化案」誕生の経緯と「ザカフカス連邦的同盟」が「ザカフカス連邦」に移行した理由についてだったように思う。その議論からは、ザカフカス連邦の成立がかなり複雑な要素が絡み合った結果であり専門家の間でもその議論は未だ決着まで遠いことを窺い知ることができた。



その他の参加者との議論の中では、ザカフカス連邦としての統合の在り方、統合と軍再編の関係、党組織としてのカフカス局の位置づけ、のちの中央アジア再編との比較、トルコとの対外関係の中でのザカフカス連邦が持った意味、ソヴィエト連邦加盟国として三共和国の規模がロシア、ウクライナ、ベラルーシと比べてかなり小さいことなどが討論された。

「自治化案」の議論が取り上げられたように、ザカフカス連邦について考察することはソヴィエト連邦の形成とその後の方向性を考える上で非常に重要だと考えられる。報告者による研究の更なる深化に期待したい。

【記：井上岳彦（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）】